

令和 5 年 7 月 6 日現在

機関番号：32618

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23020

研究課題名（和文）「称名寺聖教」を中心とした中世日本における喫茶文化の受容に関する研究

研究課題名（英文）A study on the reception of tea culture in medieval Japan with a focus on Shomyoji shogyo

研究代表者

張 名揚（CHANG, MINGYANG）

実践女子大学・研究推進機構・研究員

研究者番号：80850875

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：栄西の『喫茶養生記』は日本最古の茶の専門書であり、密教思想をベースにして記されたことはつとに論じられている。『喫茶養生記』の「天」を茶で供養するという記述は、中世日本の密教星供との関連が見られることから、中世日本の喫茶文化について明らかにするためには、密教儀礼との関わりについても検討する必要がある。本研究では、密教星供に関する記述を持つ「称名寺聖教」を主な資料とし、中世日本の密教寺院における唐代の思想文化の受容状況を確認し、中国密教星供における茶を用いる密教儀礼の成立下限を中唐期に遡れる可能性を提起した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「茶禅一味」という言葉があるように、茶と禅との関わりは従来注目されてきた。しかし中世の密教星供において、茶は代表的な供物と知られているように、喫茶文化の世界は決して禅のみによって構成されるものではない。本研究は、これまであまり茶の検討に用いられてこなかった、多様な形式を持つ密教の「聖教」を主な資料とし、いっそうリアルに当時の茶を認識していくことを目指す点において、学術的な意義があるといえる。また単なる新たな資料の抽出にとどまらず、中国から伝わる日本の喫茶文化はどのような融合や相克の過程を経て形成されたのか、より広い視野で検討する視点を提供できた点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Eisai's 栄西 (1141-1215) Kissayojoki 喫茶養生記 is the oldest book specialized in tea in Japan, and scholars have discussed how it was based on esoteric Buddhist thought. A connection to esoteric star offerings can be seen in the Kissayojoki's discussion of ritual offerings of tea to Ten 天. For this reason, in order to clearly understand medieval Japanese tea culture, it is necessary to investigate its connection to esoteric ritual. This study takes as its main source the Shomyoji shogyo 称名寺聖教 which contains descriptions of esoteric star offerings in order to confirm the reception status of Tang-dynasty thought and culture in medieval Japanese esoteric Buddhist monasteries, and to propose the possibility that the terminus ante quem for rituals using tea in Chinese Buddhist esoteric star offerings is the Middle Tang period.

研究分野：中国哲学

キーワード：称名寺聖教 密教 星供 喫茶養生記 喫茶文化

1. 研究開始当初の背景

日本最古の茶の専門書とされる栄西(1141-1215)の『喫茶養生記』は、栄西が入宋時の見聞をもとに完成させたものである。栄西は中国で禅を学び、また『興禅護国論』という禅の本旨を述べる著作があるため、本書は禅宗と結び付けて考えられることが多い。しかし、本書には密教書の引用が散在しており、栄西が述べる、「天」などに茶を献上するという記述が密教関係の資料と共通していることから、本書、ひいては中世日本の喫茶文化を考察する際には、密教との関係も視野に入れる必要がある。

密教儀礼における茶や中世日本の喫茶文化を語る資料としては、称名寺(横浜市金沢区)所蔵・神奈川県立金沢文庫管理の国宝「称名寺聖教・金沢文庫文書」がある。「金沢文庫文書」と「称名寺聖教」について、既に数多くの考察が行われているが、茶に関しては、「称名寺聖教」より「金沢文庫文書」に記載された記述をまとめて考察するものが多い。「金沢文庫文書」の基本的な整理は、早くは熊原政男氏の『鎌倉の茶』(河原書店、1948)において、関靖氏の『金沢文庫古文書 附録一 中世名語の研究 金沢文庫古文書々状篇を通じて』(神奈川県立金沢文庫、1959)において行われており、これらが「金沢文庫文書」を扱う研究の基本書的な存在である。また「金沢文庫文書」に基づく考察によって、喫茶と社会生活・寺院生活についての研究も進められており、橋本素子氏は「鎌倉時代における宋式喫茶文化の受容と展開について 顕密寺院を中心に」(『寧楽史苑』46、2001) 同氏『中世の喫茶文化 儀礼の茶から茶の湯へ』(吉川弘文館、2018)において、中世の喫茶文化における顕密寺院の重要性を示し、中世茶の生産について考察している。仏教文化史の視点で「称名寺聖教」を考察し、また「称名寺聖教」に見える喫茶文化の様相について考えるものとしては、高橋秀栄氏「鎌倉時代の密教書にみる茶」(『金沢文庫研究』315、2005) 高橋悠介氏「密教儀礼における茶」(『武家の都 鎌倉の茶』所収、神奈川県立金沢文庫、2010)などがある。

こうした諸氏の研究によって、顕密仏教と茶との関わりから中世日本における茶の社会文化的側面について明らかにされてきているものの、中世日本の茶はどのような思想・背景のもとで扱われてきたのか、中国の喫茶文化の諸相との関係性を見出しうるのか、また『喫茶養生記』に見える栄西の文言と「称名寺聖教」との共通部分について検討するものは、僅少と言わざるをえない。

2. 研究の目的

本研究は、『喫茶養生記』に見える栄西の文言を手がかりとして、「称名寺聖教」を中心に、中世日本の喫茶文化と密教、および日本に伝来した密教を育む中国の思想文化との関わりについて考察する。このような思想史的・文化交流史的な視点から考察を行うことによって、中世日本の喫茶文化の形成過程における密教の影響を明らかにすることが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1) 「称名寺聖教」における星供関係資料の整理

研究代表者はかつて供物としての茶について、称名寺所蔵「順忍書状」(「金沢文庫文書」994) 紙背「題未詳聖教」と「秘鈔口決 本抄第十八巻」(129 函-21)) について、両者を対照しながら考察を行ったことがある(「宗教思想史に見る仙薬としての茶」、『名古屋大学中国哲学論集』、16、2017・「同(続編)」、同、17、2018)。その結果、密教では星宿に茶を供物として捧げるのが一般的であるが、星宿ではない尊格を茶で供養する背景には、「天」に位置づけられる星宿の信仰があることが明らかになった。そこで、文化庁文化財部美術学芸課編『称名寺聖教目録』(同、2006)に基づき、「称名寺聖教」に見える星供関係の資料を抽出し、そこに記された茶の形態、星供における供物の特徴などを考察する。

(2) 『喫茶養生記』に見える文言と日中資料の比較研究

『喫茶養生記』には既存資料の引用が多く、栄西自身の考えもしくは当時の状況を反映するものとして、引用部分以外の地の文(栄西の言葉)が重要な手がかりとなる。本研究では『喫茶養生記』の地の文の部分と、日本と中国の資料との共通点について考察を進める。この際、特に留意したいのは以下の二点である。

仙薬としての茶と仙人

『喫茶養生記』はその書名が示すとおり、喫茶による養生という概念を表すものである。したがって、栄西が本書に記す「仙薬」としての茶も、薬品としての茶と推察される。しかし、岩間眞知子氏が指摘するように、日中の医薬書に茶を仙薬とするものはない一方、『覚禅鈔』などの密教書では茶を「仙薬」としている(同氏『喫茶の歴史 茶薬同源をさぐる』(大修館書店、2015))。この点からも、『喫茶養生記』が受けた密教からの影響がうかがえる。

茶を「仙薬」と明記する医学資料がない一方、仙人と思われる、もしくは仙人に近い存在が茶を飲用することを記す資料は日中それぞれに伝わっている。本研究では中国における喫茶の仙人を記す資料から、日本における仙薬としての茶と、それを飲用する仙人との関係を形成させる背景について検証する。

供物としての茶に関する記述

『喫茶養生記』下巻「喫茶法」には、宋代中国における代表的な喫茶法である点茶法が記されている。興味深いのは、点茶法を述べる「喫茶法」には、「天」を茶で供養するという記述が挿入されていることである。

『喫茶養生記』の初治本は、栄西二度目の入宋(1187)から帰国(1191)し、さらに二十年後の承元五年(1211)に著されたものである。生涯密教僧として活動していた栄西であれば、入宋時の記憶よりも、密教寺院に伝わる宋式の点茶法を意識して『喫茶養生記』を執筆した可能性は高いと考えられる。この点に注目し、本研究では「称名寺聖教」に見える茶の調理法に関する記述と併せて考え、中世日本における密教星供に使用される茶の形態について考察する。

4. 研究成果

(1) 「茶」と「荼」から考える密教星供の成立

我々が日常的に飲用する、いわゆる「茶(ちゃ)」は、顧炎武(1613-1682)の考察によれば、中唐期(766-826)以前には「荼(と)」と呼ばれていたようである。「称名寺聖教」の星供に関する複数の資料にも「茶」と「荼」の字が混在している。「茶」という字が「荼」から生まれた新字であれば、少なくとも称名寺に伝わるいくつかの密教星供のテキストは、唐代の密教儀礼に基づくものから伝写された可能性が高いことがわかった。さらには、日本密教の星供は中国の作法を取り入れたということに加え、中国密教が中国当地の喫茶文化を受容し、その独自の星供の儀礼を形成させる時期が、おそらく「荼」の字が使用されていた中唐期以前の可能性があることを明らかにした。

もう一つ注目しなければならないのは、密教が本格的に中国に伝来したのは開元年間(713-741)とされることである。この時期は、禅と茶が広まった時期と重なっている。開元年間における茶、禅、密教の状況とその日本への伝播を改めて考える必要があることも、今後の課題として提起した。

(2) 仙人が茶を嗜むという認識の淵源

称名寺所蔵、鎌倉後期の書写とされる「順忍書状」(「金沢文庫文書 994」)紙背「題未詳聖教」(以下、「題未詳聖教」と略称)は、「(茶は)仙人の翫ぶ所なり」からはじまり、星供に関する理論について述べている。星宿を茶で供養することについては、中世の密教書にも散見されるが、仙人が茶を嗜む理由について具体的に述べられた資料は、管見に入っていない。

中国では早くから、仙人と山林は深い結びつきを持つものと見なされていた。「仙」という「人」と「山」から成る漢字の成り立ちや、登仙を目指す道士や不思議な力を持つ僧侶が山林で修行すること、密教経典では山林を住处とする神通力を持つ者を「仙」と漢訳することなどが、その事由となる。喫茶文化史において著名な丹丘子と単道開も、山林に住む奇異な修行者という特徴が強く描写されており、仙人に近い。また、茶は山に生育するという認識も、『茶経』や平安時代の漢詩にうかがえる。山林に自生する茶が、山林に住む「仙人」に飲用されることは、決して連想しがたいものではない。「題未詳聖教」に見える「仙人」が茶を好むという認識は、丹丘子や単道開といった中国の山林に住む仙人の喫茶に由来する可能性が高いといえる。

なお、称名寺が所蔵する星供に関する資料「北斗」二点(14函-3、45函-3)には「諸聖仙人」が「茶汁」(あるいは「茶汁」と表記)を飲用すると記されている。山林修行者のイメージの強い「聖(ひじり)」と「仙人」が並列されている点からは、両者の関係の近さが推察できる。この点を手掛かりに、今後は茶を供物として捧げる密教尊格について研究を深めていきたい。

(3) 中世密教寺院における点茶法の導入時期

中世日本の密教寺院は、天部に位置付けられた星宿を茶で供養する理論を継承しつつ、新しい世俗の風潮の影響を受けて作法に変更を加えていった。『秘抄』『秘鈔口決』『薄草子口決』な

どの資料を対照してみると、中世日本の密教星供に用いられる茶の調理法が、唐式の煎茶法から宋式の点茶法に変わっていく段階にあることがわかる。そして『秘鈔口決』『薄草子口決』において点茶法と思われる方法で調理される茶が、煎茶法で調理される伝統的な茶より上位に位置づけられる点から、高橋悠介氏が指摘するように、十三世紀後半から点茶法が重要視されるようになったことがわかる（前掲「密教儀礼における茶」）。

一方で、栄西の『喫茶養生記』下巻「喫茶法」には、点茶法と思われる作法が記されており、事例として前述した「天」と「諸天」を茶で供養することを挙げている。『喫茶養生記』が密教思想を踏まえて記されたこと、点茶法を記した箇所には「云々」という根拠を示す語が見えることなどから考えると、生涯密教僧として活動していた栄西は、密教寺院に伝わる宋式の点茶法を意識して『喫茶養生記』を執筆した可能性があり、また密教寺院における点茶法の導入を十三世紀初頭に遡ることのできる点を示唆した。またこのような喫茶法の変容とともに、星供に使用される茶を盛る器具にも変化を見出せる。この点に関しては日中文化交流のみならず、日本における物質文化と仏教の交渉、そして禅・密などの多様な宗派間の交流などを総合的に考えあわせなければならず、現在の研究課題につながるものとして継続的に検討を進めている。

なお、前記『秘抄』などの密教書の伝授に関与する人物は、いずれも醍醐寺（京都市伏見区）との関係が深い点に注目されたい。中世醍醐寺における新しい喫茶文化の受容、およびその東国への伝播についても、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 張名揚	4. 巻 252
2. 論文標題 「称名寺聖教」に見える「茶」と「茶」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中世日本の茶と文化 生産・流通・消費をとおして（アジア遊学）	6. 最初と最後の頁 32～43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 張名揚	4. 巻 40
2. 論文標題 仙人と茶 中国から日本へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 年報（実践女子大学文芸資料研究所編）	6. 最初と最後の頁 225～244
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002238	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 張名揚	4. 巻 347
2. 論文標題 「称名寺聖教」から見る密教星供と唐宋期の喫茶文化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金沢文庫研究	6. 最初と最後の頁 14-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 張名揚	4. 巻 73
2. 論文標題 宗教儀礼に見る仙薬としての茶 「称名寺聖教」を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東洋研究所所報	6. 最初と最後の頁 10-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 張名揚	4. 巻 34
2. 論文標題 《續高僧傳》 感通篇 譯注(四) 釋慧實傳 釋僧雲傳 釋僧遠傳	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 古今論衡	6. 最初と最後の頁 166-181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 張名揚
2. 発表標題 宗教儀礼に見る仙薬としての茶 「称名寺聖教」を中心に
3. 学会等名 大東文化大学東洋研究所 2019年度国際交流講演会(招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関